

Title	プラトンの美と藝術とに對する考察
Sub Title	
Author	青木, 巖(Aoki, Iwao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1926
Jtitle	哲學 No.1 (1926. 10) ,p.139- 188
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000001-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プラトーンの美と藝術とに對する考察

青 木 巖

序

此小論は、去年の初め英文で書かれたもので、今それを譯し乍ら讀んで行くと、色考へ直したり、又書換えたりし度いと思ふ箇所が随分ある。併し、遺憾ながら、目下のところ、さうするだけの余裕がない。只、今も昔も相變らず私の抱く全體としてのプラトーンに對する態度は、文字通りの *Platon verstehen, heisst über ihn hinausgehen.* との主張には反對であることだ。少くともそうあり度いとは、私日頃の希望である。

既に、⁽¹⁾ポニーニツツの説ける様に、シュライエルマツヘル以後、プラトーン研究の大問題は、彼の對話篇のうち眞銘ならざるものを除去し、その残れるを時代的に研

究し、以て歴史的に彼の精神的發展の跡を辿ることと、第二にそのひとつひとつの對話篇を基礎として、プラトーン哲學の統一的體系を求むることと、せらるゝ様になつたのである。所が私は以下の小論に於て、些も是等の問題には、少くとも表面上、觸れてゐない。これ時間の都合上、已むを得なかつた事情ありと雖も、學の見識の足りない私が疎漏の譏を免れざる第一の點である。次にプラトーン研究中、彼の美學に關する檢討程至難のものはあるまい。それが難事中の難事であるだけ、私の次の小研究は多くの缺陷を有つてゐる譯である。私が幸ひ未だ若年であることと、斯様に貧弱な研究でも、將來のより完全なる、より纏りたる研究への一階梯を作すものであらうとの口實を以て、大方の寛恕を乞ふ。

(1) H. Bonitz, *Platonische Studien*, Berlin 1875, Vorwort.

一、プラトーンと美學

既に周知の如く、ディオゲネースは、⁽²⁾クセノファネースがホメーロスとヘーシオ

ドスとに酷評を下したことを指摘してゐる。「ホメーロスとヘーシオドスとは、窃盜、姦淫又相互欺瞞の如き、人間社會に於ても恥づべく責むべき事どもを、總て神々にも歸してゐる。」⁽³⁾と、クセノフアネースは慨嘆してゐるし、尙ヘーラクライトスも亦、「ホメーロスは競技會より除外されて鞭たる可く、アルヒロホス亦然り。」⁽⁴⁾と叫んだと云はれてゐる。

希臘の哲學者なるものが、藝術並びに藝術家に對し批判的立場に立つたと云ふ事實は、歴史上かなり古くからであつたかに見える。そして、歴史家乃至哲學史家は、之等の批判を、その當時のフエージスを基本とした哲學と藝術との杆格と觀、或は又之をその哲學と宗教との間の閑ぎ合ひと見做してゐる。併し、中には之等を全然哲學とは無關係なるものとして取扱つてゐる人もある。伊のクロイチエの如きその代表者である。曰く、之等の反省、觀察及び論争のうち、一として本來藝術の本質に就ての眞に哲學的問題を意味せしものなし。⁽⁵⁾ *Nessuna di queste riflessioni, osservazioni e discussioni importava una vera e propria questione filosofica circa la natura dell'arte.*と。吾々に殘されたる僅少にして不統一なる斷片集に現はれたるものを、無

反省無批判的に、總て希臘初期哲學者の哲學思索の跡を辿る唯一の材料となし、皆て之を尺度として議論することは、再考を要する態度である。實際、又その初期哲學者時代に、既に何等かの形態に於て、美學が一の哲學的デイシプリンとして存在してゐたと考へることは不可能である。然し一面吾々希臘初期哲學を研究する場合、最初の且つ最後の信賴すべき材料は此の斷片集である以上、單にクロイチエの如く斷言も出來ないのである。一寸考へれば、美學的意識とか研究とか云ふものは、美的創造と常に同時的な或は少くとも直續的な連鎖關係に立つのが妥當の様
様に思はれる。然し事實はそうでなく、ヘレニエスの國に於ても、藝術が目覺まし
い繁榮を來した總ての國々に於ると同様、創造の時代は、傳令使の如く常に幾許かの時を隔てて批評の時代、反省の時代に先つてゐたのである。今假に、⁽⁶⁾クロワゼの説を採り、ホメーロスを西紀前九百年頃の詩人と見るならば、希臘初期哲學者の間に起りし美學的意識に就ても、クロイチエの如き否定論は賛成が出來ないと思ふ。
實際、散文の世界より漸く區別せられんとしつゝあつた詩的想像の本質に對して向けられた、此道德的且つ形而上學的な判斷は、寧ろ藝術創造の自然的經過であり

より價值ある學說を形成する自然的先驅者だつたのである。⁽⁷⁾

若し、此の一ヘーラクライトス、一クセノファネースの粗野なる美學的意識を、搖籃時代に於る哲學的反省と重要なる關係に立つと見ることが全然無意味であるとするならば、後代現はれたるプラトーンの對話篇に體系も統一もなく散在する、その審美的反省や美學的意識をも、吾々は何等哲學的に意味なきものと取扱つて何の誤謬もないのではなからうか。而も、クロイチエは、希臘に於て、藝術及び藝術機能が始めて哲學問題となつたのは、かの詭辯學派運動の後ソークラテース學派の辯證論の結果としてである。⁽⁸⁾と説いてゐる。世に所謂詭辯學徒時代よりテフネーなる概念に異常なる思索がよせられたのは、疑ふべからざる事實であり、且つ西歐哲學史上に於てはそれが最初であつた。併し、之が、西歐哲學史上此時代に、始めて藝術や美の問題が一の哲學的デイシプリンとして勃興して來たとか、又は此時代以前には全然斯の如きものがなかつた等と云ふことを、意味すると思惟するのは誤である。私が考へるのに、若し此の詭辯學徒時代が何ものかを意味するものとするれば、それは第一次的な批評の出現でなくて第二次的な批評論と云つたも

のの起生であつた。殊に其時代を繼承したプラトーンが、西歐史上始めて、云はば哲學的美學乃至認識論的美學とも名付けらるべきものを齎したのは意義深い現象と云はねばならない。これ、私等がプラトーン的美學を研究するに際し、彼の他の哲學思索とその美學とを解離しては全然不可なる所以である。又此處にプラトーン美學の最大なる意義があると思はれる。兎も角も、プラトーン或はソークラテース以前に於ける初期希臘哲學者間に毫末も藝術及び美の問題に就ての哲學的反省が存在しなかつたと考へるのは間違である。と云つて、又プラトーン美學の特有なる史的意義並びに或意味での超史的價值を看過することは、前者の態度以上に危険である。換言すれば、プラトーン以前に於る彼の斷片的なる審美學的反省は恆に道義的影響より逃れ得なかつたのである。之に對し、プラトーン的美學は、假令斷片的ではあり、倫理學的原理と或る關係に立つてゐたものではあるが、決して其關係は不離な形に於てではなく、却つて獨立的にして而も相交的關係に立つてゐたのである。

美と藝術とに對する古代希臘の傳統を承けたプラトーンにとつて、美學の原理

及び思索が倫理學のそれによつて彩られてゐたと云ふ事は自然の勢であつたらう。然し、それが亦哲學の他の諸原理及び思索に據つて立つてゐたと云ふことは、深く銘記すべき事である。「プラトーン」の美學が常に彼の倫理學と密接な關係を保つてゐた。それは事實である。併し彼が彩らんと考へたのは、生命自體であり、行動であり又人性である。⁽⁹⁾私達は常に二つの點、そして之は此小論の主眼點である、即ちプラトーンが美及び藝術に對する考察に於て、彼はそれを一の嚴格なる哲學的ディシプリンとして取扱つたのではないが、他の諸原理諸規範とは獨立的に思索したと云ふことと、今一つは彼の美學が彼の形而上學及び認識論と不離の關係を保つてゐたと云ふ事、とを記憶しなければならぬ。

クセノフォーンの「メモラビリア」⁽¹⁰⁾より屢々引照される章句より推せば、ソークラテースは美を全然功利的に解してゐた様である。その後を繼承したプラトーン⁽¹¹⁾も亦功用を以て、美はしきもの「の基準としてゐる様である。然し、プラトーンが美自體を功用とか快樂とか何かと同一視したと推斷するのは愚なる早計である。私の考ふるプラトーンに於る美學の史的意義は此觀方が誤謬であると云ふ一事

に存するのである。『Platon ist insofern als der Begründer der Aesthetik oder Kunstphilosophie zu betrachten; aber nicht als ein abgesonderetes Gebiet menschlicher Thätigkeit erweckte die Kunst sein Interesse, sondern von seinem etisch-politischen Standpunkte aus würdigt er ihre Leistung.』⁽¹²⁾ とミュラーは云つてゐる。併し斯う云つて終へば、プラトーンに何等美學史上意義のあるものを求め得ないこととなるのみならず、プラトーンを如何なる意味でも美學のベグリウンダーと見ることにも出来なくなる譯ではあるまいか。プラトーンの美及び藝術に關する思索は、元來倫理的又宗教的動機の上に形成されたものではなく、實に純なる哲學的動機に發するものなのである。『プラトーンが認識論及び倫理學の將來の發達の爲の基礎づけをした人であると云はれるのと同じ義で、又はそれに準らつて彼を美學のベグリウンダーであると名付ける事は不可能である。』⁽¹³⁾ と、その一名著に云つてゐるヘルマン・コーヘンの言は至當である。アリストテレスやカントの美學と同じ水平線に置いて、プラトーンのそれを眺めることは、不當の多くをプラトーンより窃取するの態度である。併し、又反對に形式殊に發表と云ふことに重きを置くの餘り、西歐美學史を論ずるに際

し體系あり統一あるアリストテレースを重要視するの餘り、プラトーンを捨てて顧ざる者があれば、私は、今獨逸のアリストテレース研究の權威キエーガー教授の著を一讀せん事を勸むるのである。プラトーンよりアリストテレースへの推移の跡を明かにせん爲である。

(2) 9, 13ff

(3) H. Diels, Die Fragmente d. Vorsokratiker, Berlin 1922, Band 1, S. 59-60

(4) Ibid. S. 86

(5) B. Croce, Estetica, 1922 Bari, p. 172

(6) A. et M. Croiset, Histoire de la littérature grecque, Paris 1910, Tome 1, p. 415-420 参照

(7) B. Bosanquet, History of aesthetic, London 1922, p. 10

(8) Op. cit. p. 171

(9) W. Pater, Plato and Platonism N.Y. 1905, p. 255

(10) 3 8; 4, 6

(11) Gorgias 474 C-D

(12) S. Müller, Geschichte d. Theorie d. Kunst bei d. Alten, Breslau 1834 S. 27

(13) H. Cohen, Kants Begründung d. Aesthetik, Berlin 1889. S. 10.

二、美に就て

イ、美なるもの

ゴルギアスに於て、ソクラテースはポロースに對し、然らば他の總ての事物、形態及び色彩等を美と云ふ場合、快樂或は功用又はその兩者を規準とするに非ずや⁽¹⁴⁾と云つてゐる。此一句を以て直ちにプラトーンの定見を求めることは不可である。併し他の對話篇或は其他より推論して、プラトーンが「美なるもの」に對する規準を功用 (*epistēmē ēn xreia*) と快樂 (*hēdonē*) の二者に求めてゐた事は、窺ひ知られるのである。併し、以上の定見は「美なるもの」に對するものであつて、美自體に對する彼の定説或は定義は、その對話篇の全集を通覽するも何處に求め得べくもない。⁽¹⁵⁾「美は柔軟にして油の如く、その故に容易に吾等の眼を掠め逃避するものである。」此の美自體と「美なるもの」との關係に就ては、次に述べんとする所であるが、兎も角も「美なるもの」の規準を、プラトーンがヘードネーとオーフェレイアとに見出した、と云

ふことは肯定されねばならない。斯くしてこそ始めて「美なるもの」と美自體との關係も明瞭に確定されるのではなからうか。

美と功用との關係は、何人にも了解し得られる處であるが、美なるものの規準たるべき快樂とは一體如何なるものであらうか。單純な感覺的快樂を意味したのであるか、或は又プラトーンはもつと複雑なるものを考へてゐたのであらうか。之は一考を要する問題である。それが單純なる感覺的のものでなかつた事は何人も速座に考へ及ぶ事であらう。併し、之を反對に純智識的なものと見るのは又誤である。唯私は、プラトーンの稱する快樂にはコグニティヴな要素が重要な部分を占めてゐる事を看過してはならないと思ふ者である。要するに、プラトーンの「美なるもの」の規準たるべき快樂とは、純感覺的のものでも、亦純智識的のものでもなく、兩者を混有したもののなのである。伊のグロツバリ教授は、之に就て興味ある研究をもつてゐる。⁽¹⁶⁾

次に問題となるのは、然らば之等二つの規準は單に「美なるもの」(to kalon)に適用されて、美自體 (auto kalon) に無關係かどうかと云ふ事である。之は甚だ重大問題

で、私はその判断を次の絶対美或は美自體の検討の結果に據らしめやうと思ふ。

唯、美なるものと關連して吾々の記憶しなければならぬことは、プラトーンが美學の圏内に價值と云ふ概念を強く導入したと云ふ一事である。假令、功用と云ふものが經濟的であるにしろ、又快樂が感覺的であるにしろ、兩者は共に價值の世界に關するものである。プラトーンの範疇論上から云つて、彼が美とか善とかを價值なる範疇に包含したと云ふ事は忘るべからざる事である。⁽¹⁷⁾

(14) Gorgias 474 D; Cf. Respublica 601

(15) Lysis 216

(16) La dottrina del piacere in platone e Aristotele, Memorie, Tomo 21, p. 132; 尙 Phileb. 51 參照

(17) Theaetetus 185 A-186 C

ロ、美 自 體

プラトーンの美に對する考察のうち、その最も重要にして至難の問題を、此の美自體と云ふ彼獨特の思索とする。ソークラテースが美を適合性とか有効性とかに求めたのは、前述の如くであるが、プラトーンは、その有効とか快樂とかを常に「美

なるもの「の世界に結合して考へ、別に美自體なる世界を創り出したのである。實に、彼が美に immanent なものと transcendent なものとを區別したと云ふことは、單に美學史上のみならず、哲學史上誠に大なる意義のあるものと云はねばならない。(18) 斯くの如く、美なるものと快樂功用とを結合し、絶對先驗的美自體と對立せしめてプラトーンを觀ることは、識者或は、牽強不解の説として排し去るかも知れない。併し、私は此の小論を通じて、それを主張し度い希望である。「幾多の美なるもの、幾多の善なるもの、及び其他總て吾々の記述し定義するものに就ても亦然りて、皆幾多なる修飾語が適用される、とは古くから云はれてゐる。而して亦、美自體、善自體と云ふものもあり、其他凡そ「幾多性」を有つものには總てその純粹なる自體の形があるものである。何となれば、それらはその各々の本質と目せられる一のイデアの下に置かれるからである。」⁽¹⁹⁾ 序ながら斷つて置くが、私の希望としては、此段は甚だ重要なるが故に原文を其儘載せたかつたのである。所が生憎手元にはかの古いベツカー版しかないので止した様な譯である。同時に、私が此小論に於て引照する希臘原語は總て此版に由り、頁數はステファノスに據つたものなることを斷

つて置く。

偕て、プラトーンは、斯く多様性なる美なるものに、一のイデアの下に統一された
 る美自體を對立せしめてゐる。云ふ迄もなく、問題は此絶對的美自體の本質、及び
 此の二者相互の關係如何と云ふことで盡されてゐる。ナトルプは、之を原典自身と
 同じ言葉で、⁽²⁰⁾“Jene werden gesehen, nicht gedacht, diese dagegen, die Ideen gedacht, nicht
 gesehen.”と解してゐるが、成程之は原典に忠實なる觀方である。然し、果して斯く
 單純に解し去ることが全體としてプラトーンに對して忠實であらうか。此二者
 の區別はもつと根本的のものではないだらうか。單に文法的に之を觀て、單數と
 復數との對比より、概念と物との對立と見做すことは、どうしても不可である。例
 へば、プラトーンが⁽²¹⁾フイレーボスに於て *ἄρὸς τι καλὰ* と *δει καλὰ καθ' αἰρέα* とを鼎
 立せしめてゐるが如きは、斯くの如き觀方を以てしては其解釋に苦しむのである。
 人々は、以上の引照及び、*Euthydemus* 301 A.; *Cratylus* 439 C.; *Phaedrus* 249 E., 254 A.;
Symposium 211; *Republica* 476, 479, 494 A 等の諸頁を參照し、プラトーンが要するに、
 美なるものと美自體と云ふ二つの世界を常に考へてゐたと首肯することが出來

るであらう。で問題は元に返り此二世界の關係如何と云ふことであるが、私は今此處で、少しく美の問題と云ふ限られたものを離れて、一般的にプラトーンのイデア論を考へて見度い。云ふ迄もなく、プラトーンのイデア論に最初に反對の矢を放つたのは、アリストテレスである。彼が分析的に試みた諸種のイデア論批判のうち、*καρτερία* (乘離) の名に於て下した批評は最も力強きものであつた。吾等の先程より直面してゐる問題は、實に此のホーリustonなのである。之に對して如何に答ふべきか。或人は、之に對してプラトーンのイデア論そのものには何等ホーリustonと非難さるべきものはなく、それは彼の先驅者たるエレア學徒並びに彼の後繼者に對して向けらるべき批評であつて、プラトーンのイデアは單に科學方法論上より論ぜらるべく、イデアは、*die reinen Methodenbegriffe der Erkenntnis* に過ぎないと論證してゐるのである。斯くの如き觀方をしたのは云ふ迄もなくナトルプであり、斯く考へたればこそ、彼はコーヘンと並んでプラトーン研究史上忘るべからざる地位を保つてゐるのである。イデアを斯く解することを創始した彼の功績は認容せらるべきであるが、吾々は楯の半面のみを見る様な態度を採つ

てはならない。一面、吾々はイデアの美學的、倫理的及び宗教的方面を注視し考慮するの要あると共に、他面、イデア又はアイドスが根元的意義として *Augenfallige Aeusserlichkeit*⁽²²⁾ であつたと云ふ事を合せて想起すべきである。之等の點に關し、英のステットフォート教授はナトルプの缺陷を認め、之を次の様に修正したのである。

“While the Idea as sensori-motor image, or ideogram, and the Idea as scientific point of view, or concept, certainly appear as two distinguishable aperçus in Plato's methodology.”⁽²³⁾ 彼れは再び言ふ。「プラトーンが時々イデアを物と見倣してゐる事には些の疑もない。併し此場合それは理智的な論理的思惟にとつてではなく、イデアが物であるのは、藝術及び宗教の態度である冥想にとつてである。」⁽²⁴⁾と。此解釋は、彼のフィレーボス五十一頁に於けるソークラテースの言葉に強く裏書されてゐる様に想はれ、プラトーンのイデア論の近代的解釋としてかなり肯綮に近い様に考へられる。然し、斯くの如き觀方は歴史的に單なる循環をしてゐるに過ぎずして、古への *“Tritos ùvparos”* の議論に返るのであるまいか。吾々はイデアの本性につき、同時にイデアとアイスセータとの關係に就き、もつと根本的に考へて見なければなら

ない。勿論その文字通りにプラトーンを“über-hinausgehen”してはならない。

プラトーンが哲學するに際し所謂 *hypothetische Forschungsmethode* を採用したと云ふ事には、今日最早何人も疑ふ餘地はないのである。處で問題は、其假定の假定、根元的原理は一體何者であつたかと云ふことである。普通一般には、その根本的原理は善自體なるイデアであつたと思惟されてゐる。⁽²⁵⁾ 併し、プラトーンが果して斯くの如き倫理主義とも云はるべきものを抱持してゐたのであらうか。又、果して之で以てプラトーンの總てが、何の矛盾も支障もなく解明し得るであらうか。或は又、之は單にポリテイア、及びファイドーンの或箇所、の文字に拘泥した餘りの惡果に過ぎないのではなからうか。

私の考ふる所によれば、丁度、數の成立に於て、プラトーンは一の不定なる「三者」*ousas* と云ふものを根本原理として假設したと同じ意味、又方法で、美の世界に於ても亦美なるものに個體性を賦與する一の美自體なる不定のものを假定してゐるのである。斯く解せずして、前記のステュワート教授に従へば、二世界間に於ける大膽にして意味なき一大飛躍を許すこととなり、プラトーンのプラトーンらしき

特徴を無視するのである。然らば、斯くの如きイデアが一の觀念でもなく、時空に限られた物としての實在でもなく、それ自體不定なる原理であると云ふのは、それが積極的なる制約的、限定的又は規範的原理であるからである。數に一定の方向と系列とを與ふる制約者がデュアースである如く、物を美なるものとして、特殊化し個體化する限定者が美自體なのである。プラトーンの美自體こそは、物心、主客の對立的世界を超越したもので、此意味でこそ始めて、それを *transzendent* と指示し得るのである。此の非實在的な原理を素朴實在論者のオブジェクトの如く解されることは、全然プラトーンの主意に悖るのである。彼のイデアは、單に範疇的なものとか論理的概念とか云つたものではなく、實にもつと高次なる世界に屬するものである。アイドスの根本義が物の *real essence* であると云ふのもこんな意味合であらう。⁽²⁶⁾ プラトーンが美を合目的なる適應性を以て説明し又美は *oüs überpon* と云つてゐるのも、要するにカサウトとしての美と一次元低い物としての美との間に於ける適應的關係を述べたものである。斯くて、吾々はプラトーンがカントの出現を豫想してゐたとも解し得られる譯である。又私は、プラトーンを通じて、

千七百九十四年十月二十五日にシラーがケルナーに送つた書翰に云つてゐる次の數言を想ひ起すのである。“Das Schöne ist kein Erfahrungsbegriff, sondern vielmehr ein Imperativ... Es ist etwas völlig Subjektives, ob wir das Schöne als schön empfinden; aber objektiv sollte es so sein.” シュムポジオンに於て、ディオタイマはソークラテースに次の如く物語つてゐる。「それは、愛すべきものに到達せんとするに際し、自ら歩み又他によつて誘導せらるる妥當なる道は、恰も階梯を使用する如くに、眼に見ゆる美なるものより出發し彼の美自體を目指して不斷に昇り行くことである。即ち、一より出でて二に到り、二より總ての美なる形態に達し、美なる形態より美はしき行爲に及び、美はしき行爲より美はしき智學に到り、美はしき智學より最後に、彼の美自體の討究なる智學に赴くに及びて完全なる美自體の姿を知悉するのである。：
...美を眺むるに心の眼を以てし、美の外象に非ざる眞實の相を會得するのである。」⁽²⁸⁾ *οὐκ εἰδόμενα ἴδαι' ἰσχυροί* 之に由つて見て明かなる如く、プラトーンはアイスセータよりイデアへの飛躍を許さないのである。

同時に根本原理へ到達の路は、單に分析的にのみならず亦綜合的にも開かれて

ゐると云ふことを暗示してゐるのである。此章句に現はれたる眞善美の關係はやがて論ぜらるべき時の準備に銘記すべきである。要するに、今私の主張するのは、美自體を單に超驗的な實在と見たり、又は單なる方法論的概念として終へば、上記の章句や、*αὐτὸ τὸ καλὸν εἰδικρινές, καθαρὸν, ἀμικτόν* 等と云ふ言葉の意味は理解が出来まいと云ふ事である。美自體は飽迄制約的原理であり、美なるもの或は一般にアイヌセータは被制約者である。クラテュロスに *καλὸς* (美) と *καλῆς* (稱す) とを連結してゐるのも、假令それが非學問的な言語學であるにしる、私の考へに何ものか裏書する所がないであらうか。又、美なるものは *δοσεῖν* (30) することが出来るが、美自體は *ὑποσχεῖν* なる可きである、と云ふのも、結局前者が一のゾルレンなる制約的原理でないからではなからうか。美なるものは決定されべきものなるも、美自體は制約的原理的なるが故に決定され得ないものである。(31) 其他、美自體の模倣と云ふことも、⁽³²⁾ 加入と云ふ様な言葉も私の觀方よりすれば難なく了解出来るのである。終りに、私は、*„Hieraus folgt sofort, dass er das Wesen des Schönen nur im Inhalt, nicht in der Form suchen muss.“* と云つてゐるツェラーは例によつてプラトーンを

餘り簡單に考へてゐることを附言して置く。

Deiis ouu tau dporau eu vouris to eu aisthron kaliston

(2)

- (18) Cf. A. Fouillée, *La philosophie de Platon*, Paris 1922, Tome 2, p. 9.
- (19) *Republica* 507 B
- (20) P. Natorp *Platos Ideenlehre*, Leipzig 1921, S. 190
- (21) *Phileb.* 51
- (22) Cf. C. Ritter, *Neue Untersuchungen über Platon*, München 1910 S. 323-323
- (23) J. A. Stewart *Plato's doctrine of ideas*, Oxford 1909 p. 181
- (24) *Ibid.* p. 129
- (25) 其の終をたゞのさうして H. Raeder, *Platons philosophische Entwicklung*, Leipzig 1909, S. 420-426
- (26) A. E. Taylor, *Varia Socratica*, Oxford 1911, p. 181 参 Aristoteles, *Metaphysica* 1022 a 15
- (27) *Hippias Major* 288 C-E, 290 D, 291 B, 292 D-E
- (28) *Symposium* 211 D-212
- (29) *Cratylus* 416
- (30) *Republica* 479 D
- (31) *Timaeus* 47
- (32) *Hippias Major* 287; *Resp.* 501 B; *Phaedrus* 251 A etc.

(33) E. Zeller, Die Philosophie der Griechen, Leipzig 1889, Th. 2, Abthl. 1, S. 937

(34) Plotinus, Enneades, 4, 8, 4

ハ、眞・善・美

プラトーンは、常に眞理を愛し求める者(フィロソフオス)と美を追慕する者(フィロカロス)とを同一視してゐる。實に、純なる古代希臘の傳統としては、美は善にして善は又美なると共に、キーツの咏へる如く、Beauty is truth and truth is beauty. だつたのである。古代希臘に屢々用ひられた言葉、カロン、カガソンは、カロン、テ、カガソンではなかつた。カロス(美)と云ふ言葉に就て、希臘に於て、カロスは常に一定の動搖を以て、英語の Beautiful と云ふ字義とラテン語の Honestus と云ふ字義との間を浮漂してゐた。⁽³⁶⁾と云つてゐるブラツキ教授は正當である。斯く、希臘の美なる字義それ自身がすでに、或時は眞を又或場合には善を意味したと云ふことと、プラトーンがその傳統に従つてゐたと云ふこととは記憶しなければならぬ。⁽³⁷⁾

人、動もすればプラトーンの美と云ふものに倫理的内容を過大に包攝せしめん

とする傾向がある。勿論之は程度問題である。併し、斯くすることによつて、吾々はプラトーンに於ける眞善美の關係に就て、了解するに苦む點が多くないであらうか。プラトーンが單に貴族の出であると云ふことが何等論據とはならないが、兎も角、彼の世界觀が非常に階級組織的であつたことは事實である。併し、その階級組織的と云ふのも單に假設的討究方法を意味するのみであつて、倫理偏重主義とも名付けらるべき意味で、ヒールヒッシュなものもを彼は考へてゐたのではない。總ての根元を善のイデアに求めたと云ふのではなく、もつと根本的階級組織を彼は豫想してゐたのである。此事は、既に前章で説いた所であるから、今再び改めて云ふ迄もないことである。眞善美は常に區別せられ乍ら、其間何等の價値的な又本質的な優越關係はなかつたのである。

然らば、眞善美が各々明確に區別せられた獨立價値であると云ふことと、美自體との關係、及びそれ等が時として區別せられなかつたと云ふ事實は、一體如何に解すべきか。私の解する所に依れば、プラトーンは、假令時々の混同はあつたにしろ、全體として眞善美が獨立的な價値として考へられるのは被制約者の世界に於て

であつて、制約的原理に於ては、彼等は一にして不離であると見做してゐた様である。智識、行爲、價值評定、情意、其他總ての根元をなす制約的原理は常に不定であつて、時としては美自體ともなり、デュアイースの如きものもとなるのであつて、それによつて個體化され制約されたものは、美なるもの其他になるのである。斯く解することとは再び牽強附會の説と一見思はれるかも知れない。併し、斯く解せずしてプラトンのあの多き矛盾及び混同を如何に見やうと云ふのであるか。成程、ノモイに於て、アテンの一遊子が、又、美が徳行よりも宜しと云ふが如きは、實にそれこそ何たる靈への冒瀆であらうか。之れとりもなほさず肉が靈よりも尊いものであるとの意に外ならないからである。⁽³⁸⁾と云つてゐることは、一見私の考に反證を提供してゐる様に考へられる。併し、此場合の *καίνος* はソーマの既に個體化され制約された状態を指してゐるのである。また、フィレーポスに、⁽³⁹⁾ソークラテースが、善を狩るに、美、調整、眞の三者を囿とせんと云つてゐるが如きも、單に制約的原理とアイスセータとの間に飛躍は許容せられないと云ふことと、眞善美の三者は不離の關係に立つと云ふこととを、意味するに過ぎない。然し、一面文法的方面よりし

て、人はシユムポジョン二百一頁の如きを挙げ、時にはプラトーンが *τὴν αἰσθητικὴν* と *κατὰ* とを同一視してゐることを指摘し、以て私の「被制約者の世界に於て眞善美は常に區別されてゐた」と云ふ解釋に反對するかも知れない。併し、區別とは本質的乖離を意味するのではない。要するに、以上の私の卑見は單なる假定に過ぎないかも知れない。併し、それが單に假設なるの理由により人は之を一蹴し去ることは出来ない。リーマン幾何學のユークリッド幾何學に對すると同じ關係である。唯私は、常に全體としてプラトーンに忠實なれば満足であつて、文化教育の一般特性は、寸分の精確さよりも、言句の自由なる使用に在る。⁽⁴⁰⁾とのプラトーンの明言に賛する者である。美自體、善自體又は眞自體は皆同一の資格にて一者として制約的原理であり、プラトーンの名付くる *ἐπιπόρευσις* であつて、個體化され、區別化された眞善美は被制約者であり、*ἐπιπόρευσις* である。

終りに、スピノーザの *Substantia* と *attributum* と比較して考慮するのも面白いと思はれる。⁽⁴¹⁾つまりプラトーンの稱するイデアを前者と見れば眞善美の如き特殊化されたものを *attributum* と見られ得るのである。

- (35) *Republica* 475, 484, 485, 486 A; *Phaedon* 82
- (36) J. S. Blackie, *On beauty*, Edinburgh 1858, p. 183
- (37) *Lysis* 216; *Tim.* 54; *Symp.* 201 B, 204 E; *Resp.* 452
- (38) *Leges* 727 E
- (39) *Philebus* 65 A
- (40) *Theaetetus* 184
- (41) *Ethica* 1, 10 Sch.; 1, 45. *Lettre IX* (27)

三、藝術に就て

1. 藝術一般

プラトーンに無能なる藝術論者として酷評を下す人のあることは、今も昔も變りはない。⁽⁴²⁾ プロクロスは、カリマコスとデウーリスとがプラトーンの批評家として無能なることに就て饒舌を弄したと傳へてゐる。ツェラー教授は之に對し、⁽⁴³⁾

Gerade weil Plato selbst Künstler, aber philosophischer Künstler ist, kann er der Kunst nicht

gerecht werden. と藝術論者としてのプラトーンに酷評とも賞讃ともつかぬ事を言つてゐる。吾々は如何に之を觀るべきか。次の各章は之に應ふるであらう。

A 藝術の本質について

先づ最初に、プラトーンの企圖したる藝術分類表を掲げることが最も當を得たる道と思はれる。此分類表は主としてソフィステースより拔抄綜合せられたものである。⁽⁴⁴⁾

吾々は此處では今日の所謂藝術に關してゐるので必要な故に書かなかつたが、プラトーンは尙ほ進んで獲得的藝術を分類して、有用藝術 (χρηστικὴ) と交換藝術 (μεταβατικὴ) とに分つてゐる。されば、ポリテイコス⁽⁴⁵⁾の章句を参照しても尙明白なるが如く、プラトーンは既に藝術を Fine art と Useful art とに分類することを考へてゐた様である。尙ほ此處で、私が表に現さなかつた事で、來らんとする一問題に關係あるので特に吾々の記憶して置かねばならぬことは、プラトーンが摸倣的藝術を創造的藝術に包含せしめ、殆んど常に心像創造的藝術と同一視してゐた

藝術
(τέχνη)

獲得的
(κτητική)

創造的
(ποιητική)

人性的
(ἀνθρωπίνη)

神性的
(θεία)

心象創造的 實在表現的 心象創造的 實在表現的
(εἰδωλοποιική) (αὐτουργική) (εἰδωλοποιική) (αὐτουργική)

想像的 對象表現的 想像的 對象表現的
(φανταστική) (εἰκαστική) (φανταστική) (εἰκαστική)

器具使用的
(δι' ὄργανον)

器具不使用的
(ἄνευ ὀργάνου)

と云ふ一事である。創造と云ふことが、プラトーン自身之を表現する様に、曾つて存在せざりしものを存在の世界に持來らすこと⁽⁴⁶⁾であるとするならば、私が後にプラトーンに於ける模倣と云ふ考に深い意義を求めんとするのも、直ちに是認の出來ることであらう。

偕て前に戻り、プラトーンに於て自然とテフネー(日本語の藝術には當らざれど英佛の *art* に當る)との關係を考へて見よう。アリストテレースは、藝術は自然を模倣する。⁽⁴⁵⁾ *ἡ τέχνη μιμεῖται τῆν φύσιν* との彼の史上有名なる宣言を遺してゐる。ブツチャーは此の自然(フェージス)を解して、⁽⁴⁸⁾ “the creative force, the productive principle of the universe” と説いてゐる。プラトーンに於る藝術と模倣と云ふ問題に就ては、私は次節に述べんと考へてゐるが、彼が藝術と自然との考察に於て用ひたるフェーシスの表す意味も、以上のブツチャー教授の如く解して宜いのであらうか。

誤解を防ぐ爲、私は先づ此處では、冒頭に先の有用藝術と美術との區別は問題でないことを述べて置く。偕てアリストテレースの場合には暫く措き、プラトーンが自然と藝術を論ぜし場合に於ては、自然は⁽⁴⁹⁾其言葉の示す如く、宇宙の生産的原理と

か成生とか云つたものを意味したのではなく、常にラテン語の「*status*」と関係ある「状態」を指したのである。ブートル¹等の稱するコンタンチャンスを含んだ、ありの儘の状態を指じたのである。即ち、それは *τύχη* を意味してゐたのである。之に關しては、Gorgias 483; Nomoi 655, 889, 892等を参照せられ度い。

以上の意義によつて、フューシスはアリストテレスの言葉を用ふれば、テフネ¹の褫奪された状態」を指すのである。此故に、プラト¹に於て、フューシスは常にテフネ¹と相互扶助的又不離な關係に立つてゐるのである。「神は萬物を支配し、神に伴はれて、偶然 (*τύχη*) と好機 (*καὶρός*) は人事の總てを指導してゐる。併し、之に加ふるに、テフネ¹も亦從はねばならぬ、⁽⁵⁰⁾とのもつと穩健なる第三の議論も同意されなければならぬ。」テフネ¹が⁽⁵⁰⁾ありの儘の状態なるフューシスに秩序と統一とを與へるからである。然し、テフネ¹と自然は單に上の如く、消極的な相互扶助と云つた關係にのみ立つてゐるのではなく、もつと積極的な、云はゞ文化完成の必然的な二要素として考へられてゐたのである。「辯術の完成は、他の總ての事物の完成と等しく、一部は自然によつて賦與せられ、又せられなければならない。併

し、之はテフネーによつて援助せられるのであつて……兩者の何れを缺くも不完に終る。」⁽⁵¹⁾とプラトーンは力説してゐる。ありのまゝに於ては、總ては價值なきものの世界であり歴史を離れ文化を無視した世界である。テフネー加はりてこそ始めて文化とか價值とか出現して來るのである。藝術なき文化はあり得ないと云ふ所に藝術の消極的又積極的レイゾン、デートルがある譯である、とプラトーンは考へてゐる。彼が、⁽⁵²⁾テューヘーを *εὐεργία* と看、テフネーを *εὐεργία* とするの、此意に外ならない。斯くて、先に同等の資格乃至は優劣なく眺められた、フューシスとテフネーが、今や「テフネーの生産物並びに作爲は第一義的であり、而して其後にフューシス及びフューシスの作物が來り、フューシスは第一義的創造力ではない。」⁽⁵³⁾と云はれる様になつて來た。ソフォクレースが「世に驚くべきもの幾多あれど、人間より以上に驚くべきものなし。」⁽⁵⁴⁾ *κολλὰ τὰ θεῶν, κοῖσεν ἀνθρώπων θεούρετον τέλει* と咏つてゐるのも、要するに典型的希臘人のテフネーへの禮讚ではないか。

(42) Proclus in Plato, Timaeus 28 C

(43) Op. Cit. S. 936

プラトーン的美と藝術とに對する考察

- (44) Sophista 265, 236, 219 etc.; Cf. Gorg. 450
- (45) Politicus 258 E
- (46) Soph. 219, 265; Resp. 401 A; Phileb. 55 E
- (47) Poetica 1.4, 1448^b 4; Phys. ii 2, 194^a 21; Meteo. iv, 3, 381^b 6; de Mundo 5, 396^b 12
- (48) S. H. Butcher, Aristotle's theory of poetry and fine art, London 1923, p. 116
- (49) Cf. G. Burnet, Early Greek Philosophy, Appendix
- (50) Leges 709
- (51) Phaedrus 269
- (52) Gorgias 448, 500
- (53) Leges 892
- (54) Sophocles, Antigone 334

B 模倣について

プラトーン自身が甚だ意味多様な模倣⁽⁵⁵⁾と稱してゐる現象につきて吾々は今論じようと思ふ。

今日の所謂美術なるものが、プラトーンの所謂模倣藝術の内に屬してゐたと云

ふことと、その模倣藝術が彼の稱する生産的或は創造的藝術の内に屬してゐると云ふこととは、既に私が注意を促したる點である。

偕てプラトーンは、實際藝術の模倣と云ふこと、例へば、舞踊に於る言語に於る、⁽⁵⁶⁾樂に於る、⁽⁵⁸⁾又繪畫に於る模倣と云ふことを論じてゐる。而して、彼の偉大なる獨創的天才プラトーンにとつて、普通の意味に於ける模倣と云ふことが、最も忌避すべきことであつたのは自然の勢であらう。「悲劇詩人は模倣者である。故に、總ての他の模倣者と同様、彼は真理より三階段も遠ざかれる者である。」⁽⁵⁹⁾と言つてゐるのも、又は、「模倣者の亞流よ、*μειντικὸν ἔδος* は單に靈の劣等なる部分に關心するのみ。」⁽⁶⁰⁾と慨いてゐるのも、皆世に多くある獨創を缺いた藝術家に對する痛棒である。勿論之等を解して、藝術に於ける現實主義に對するプラトーンの反抗とも見れば見得るのである。併し、斯くの如き章句よりして、プラトーンは今日の所謂藝術を模倣藝術とせし關係より、直ちにプラトーンが藝術に對し此の理解もなかつたと結論するのは早計に失する。尙ほ又、之より一步進んで Plato admits poetry to his commonwealth only so far as it is subsidiary to moral and political education. 等と、⁽⁶²⁾僅少のポリ

テイアの章句を根據に斷定を下す事も亦誤である。斯く考へ能はざることには私
が美自體以下に論じたる結果と、プラトーンが模倣藝術を創造藝術に包含せしめ
てゐる事實と相俟つて、明白であらうと思ふ。

すれば、プラトーンは一面單なる模倣を忌避しながら、他面模倣にして創造的な
る藝術と云つたものを考へ及んでゐたのではなからうか、と云ふ疑問が當然起つ
て來る。又他面より觀察して、プラトーンが模倣藝術と稱する場合のミメーシス
にはもつと深い、或意味で認識論的意義があつたのではなからうか。之等の疑問
は否定さる可きか、肯定さるべきか。若し肯定さるとせば、兩者は如何に調和さ
すべきか。

第一の疑問に對して、私は、プラトーンは、吾等の稱ぶ美術を模倣的或は心像創造
的の名の下に概括し、以て之を生産的又は事象創造的藝術と對照せしめてゐる。⁽⁶³⁾
とのポーズンケの説は一面的であるのみならず原典を無視してゐると答へる。
先に云つた如く、プラトーンは心像、事象の區別なく模倣を一種の創造と見倣して
ゐたのである。彼がソフィステースに於て、*δοσομιμητικὴν ἢ ἡμετέριον ἰστορίων μιμητικὴν*

とを區別してゐるのも、確に此間の消息を物語つてゐるのではあるまいか。プラトーンは、疑もなく創造的模倣と云つたものを考へ及んでゐたのである。

次に、プラトーンの稱する模倣と云ふことが、どんな意味を有つてゐたのかと云ふことであるが、之が單なる奴隸的模寫を意味したのでないことは確である。⁽⁶⁴⁾と云つて、彼の模倣を現今クロイチエ等の所謂表現と解することは不可能である。

私の考ふる所に依れば、プラトーンが藝術上のミメーシスとは、先に云つた美自體の模倣であつた、畢竟、被制約者が制約的原理によつて制約され個別化される現象を指すのである。斯くて、此先驗的な絶對價値を模倣すると云ふことが、やがて一種の創造となる譯である。⁽⁶⁵⁾ 斯くて、模倣とは、欺瞞せんとする試に非ずして re-live, re-present する事である。」

(55) Sophista 234

(56) Leges 655, 668, 796, 798, 814 E

(57) Cratylus 423, 426, 427

(58) Cratylus 423, Leges 655, 668, 798 E, 812 C

(59) Ibid. 423, Criton 107

- (60) *Respublica* 497
- (61) *Timaeus* 19; *Resp.* 604; *Soph.* 234, 235
- (62) S. H. Butcher, *op. cit.* p. 122
- (63) B. Bosanquet, *op. cit.* p. 17
- (64) Cf. E. Müller, *op. cit.* S. 32
- (65) J. E. Harrison, *Themis*, Cambridge 1912 p. 43

② 藝術と其職能

“Thus, throughout his literary career, we find Plato consistently maintaining that art is something quite distinct from knowledge, morality and utility, something *sui generis*; and that its object is therefore not the real or good or the useful, the object of knowledge or opinion, but an object as unique as the act of apprehending it.”⁽⁶⁶⁾とコリングウッド教授は、プラトンの目指した點を明確に告げてゐる。私の此處で言はんとするのも其點なのである。詰り、從來の學者は、プラトンの藝術觀とその審美論と共に、餘りに一面的な倫理偏重主義と云つたもので片付けてゐる傾向があるのであつて、私はそれ

が如何なる程度迄妥當なりやを考察し度いのである。元來私が此小研究に着手した動機は其處に存するのである。

プラトーンの稱する模倣なるものが單純なる奴隸的模寫であつて獨創的作爲と没交渉的に對蹠の地置に立つものであると見るのは誤であること、及びプラトーンの所謂テフネーは文化的本質を有してゐると云ふこととは既に私の主張した所である。此處で思ひついたから言及して置くが、私がテフネーを單に藝術とか或は技術とか譯さず、原語其儘を用ひたのは此種の誤解を防ぐ爲であつた。

次に私達の問題は、プラトーンが藝術の職能乃至目的と云つたものについて如何なる考へ方をしてゐたかと云ふことである。私は「先づ自分の言はんと欲する處を明ならしめる爲、⁽⁶⁾ L'errore consisteva nel credere che di quà della verità intelletiva non sia altra forma di verità.」と主張してゐるクロイチエは、其の觀方が餘りに偏頗的であることを指摘し度い。其事は、既に説いたる眞善美の觀念よりして明であらうと思ふ。プラトーンは、明白に表現せざりしも臆げながら、それ自身完全にして不可浸的な美の世界、獨自の價値を有した藝術の世界を認容してゐたのである。す

れば藝術の職能乃至目的と云つたものに就ても、彼は他の倫理的、社會的、又政治的原理にそれを隸屬せしめることは出来なかつたのである。則ち、藝術をそれ自身完全獨自な世界と眺め得たプラトンは、藝術の職能を、倫理的原理の完成の爲の手段等に求めず、藝術それ自らの完成をその職能とし、又その目的としてゐた。「プラトンは、純藝術はそれ自らの完成をのみ目的とす」と云ふ近代の考方を豫想してゐた。」⁽⁸⁸⁾とは忠實なる觀察である。此點に關しては、ポリテイア三百四十一頁より同四十七頁の間に詳述されてあるが、兎も角もプラトンは藝術の關心すべきは、それ自らの完成であり、それ自らの完成とは、そのテフネーにとつて主題目たるべきものの完成である、と説いてゐる。 *eineios ou téknyō eortia* の完成である、と云つてゐる。テフネーの主題目とは一體何であるか。ポリテイアに於て、プラトンは主として有用藝術に就て論じてゐるので、それが人又は外界事象に關する價値なることは明かである。併し、吾々は一步進んで此のテフネーの境界を擴大し今日の所謂美術迄引入れ、美術の目的乃至職能はその表現又は意味の完成にあり、とプラトンは考へ及んでゐたと云へないであらうか。私は、ポーザンケと共にそ

れを肯定する者である。⁽⁶⁹⁾

斯くて、藝術の職能に就て見ても、プラトンは藝術の有つ獨自の地位を、他の倫理政治的な、或は科學的な原理に對して、第二次的のものとして⁽⁷⁰⁾は考へてゐなかつたのである。「藝術は、普通道德改良の爲に存在するのではない」とプラトンは明言してゐる。私は尙此點を強く主張する爲、プラトロンが屢々詩的靈感に就て語つてゐるのを想ひ合せ度い。⁽⁷¹⁾「尙ほ、ムーサイの女神達の憑依を指す第三種の狂氣 *mania* がある。此マニアは纖弱にして純眞なる靈に魅入り、之を激昂せしめ抒情詩其他總ての詩を喚び起すものである。」⁽⁷²⁾思ふに、以上の如きはプラトロンの嚴肅なる理智主義及び唯理主義的倫理主義と對照して、彼の審美觀並びに藝術觀を示す好適例ではなからうか。但し人は云はん。マニアは狂亂であつてプラトロンの推賞する所に非ずと。併し問題は要するに、藝術に於ける情的要素に對するプラトロンの洞察如何である。それに加ふるに、私は彼が「ファイドロスやポリテイアに、神性のマニアは祝福である。」とか、哲學者のマニアとか云ふ言葉を用ひてゐるのを想ひ起すのである。彼に由れば、美の愛好者は鳥の如き者で、被制約者の美

を後に、彼の絶對美を天界目掛けて求め飛去る故にマニアなのである。⁽⁷³⁾之を要するに、藝術の動機は愛であつて、⁽⁷⁴⁾その目する所はそれ自らの完成なのである。

- (66) R. G. Collingwood, *Plato's philosophy of art*, *Mind* 1925 April, p. 168 ff.
- (67) B. Croce, *op. cit.* p. 173
- (68) W. Pater, *op. cit.* p. 241-242
- (69) B. Bosanquet, *A companion to Plato's Republic*, London 1906, p. 52
- (70) *Gorgias* 501-502
- (71) *Ion* 533-535; *Apologia* 22 B; *Leges* 682 A, 719 B
- (72) *Phaedrus* 245 A
- (73) *Ibid.* 250
- (74) *Symposium* 197 A

D 藝術と批評

藝術一般の項を終るに際し、私は全體としてプラトーンの考を了解するに易からしめる爲、藝術と批評に就て次の數行を加へ度い。先づ、プラトーンが詩人と批評家との互に相異つた職分に就て如何なる考方をもつてゐたかを見やう。「詩人

とは軽くして翼を有てる聖なる者であつて、彼が靈感に打たれ、その感覺を脱し、その心も早彼自らのものならずと云ふ境に達する迄は、彼に創作は起らない。……何となれば、詩人は技術に由つて歌ふに非ず、神力によるからである。⁽⁷⁵⁾とプラトンは叫んでゐる。然ればとて、プラトンは藝術に於ける技術的方面を全然無視してゐるのではない。智的方面の藝術に缺くべからざる事はイオーンの説く處である。⁽⁷⁶⁾併し、彼は常に藝術の創作に於ける情的要素を強調してゐるのである。詰り、彼はかの佛國に起つたバルナシアン運動の如きを排するのである。彼の名付ける「神性の描出」たる詩の創作に於て、技術的方面よりも寧ろ主觀的方面、情的方面を重んじようと云ふのである。

詩人は以上の如く斯くあるべきであらうが、然らば批評家はどうかと云ふに、プラトンは「一藝術に就きて何等の智識なき者は、その藝術の述ぶる所及び作す所に正當なる判断を下すことは出來ない。」⁽⁷⁷⁾と説いてゐる。畢竟、之は先の詩人に最も樞要なるは主觀的情緒なるに對して、批評家に缺くべからざるは客觀的智的要素である、と云ふことを説いてゐるのである。同書に於てソークラテースはイオ

「*Ion*」に對し、何人も認める如く、汝はホメーロスについては技術と理智とを以て(76) *Xun kai éntoñijun*) 語れるには非じ。」と云つて批評家たる者に客觀的態度と理性的基準との必要なるを説いてゐる。蓋し、イオーンはホメーロスに酔へる人だつたのである。斯く批評家は客觀的であるべきだが、具體的に然らば如何なる點に考慮せねばならぬかと云ふに、プラトンは表現の何たるか、果してそれが妥當さるべきか、又それが美にしてよく表現されたるや、の二點であると暗示してゐる。(79)

(75) *Ion* 534.

(76) *Ibid.* 532, 540.

(77) *Ibid.* 538.

(78) *Ibid.* 532.

(79) *Leges.* 638 參照

口 各個の藝術

A 詩について

“ Den lückenlosen Aufbau einer platonischen Poetik zu gewinnen, würde nicht gelingen.”⁽⁸⁰⁾
とフィンスラーが言つてゐる如く、プラトリーの詩論は實に至難の業である。併し、私の敢て此處に齎すものは、單に私が先に色々主張した點を力説せんが爲に外ならない。

詩と云ふものが、現今何處に於けるよりも古代希臘に於て、より遙か重大にして廣汎なる地位を保持してゐたかは、⁽⁸¹⁾古代希臘の普通教育の大部分が詩の暗誦であつた、と云ふ一事に徴しても了解が出来るのである。

偕て、詩と音樂とを常に不離の關係に置いてゐた古典時代のギリシヤにあつては、⁽⁸²⁾ブツチャリの主張してゐる様に詩人と云ふのは屢々詩人と音樂家との二つの特性を兼有してゐたのである。斯く詩と音樂との境界線は明確に認められてゐ

なかつたが詩と散文との區別は早くより覺認されてゐた様である。プラトンは言ふ。「偕て吾々が總ての詩より歌、韻律及び律格を除去するとせば、其處には言葉が残るのみならずや」と。すれば、彼の謂ふ所の詩とは *λέξος, ῥυθμός, μέτρον, λόγος* の四要素より成立し、前三者が畢竟散文に附加されたものである。斯くて詩と散文との區別は建てられたが、然らば詩の題材は一體何であるかと云ふのに、プラトンは過去、現在、未來の出來事の敘述が詩であると答へてゐる。すれば一見プラトンの所謂詩とは敘事詩に過ぎない様である。併し、少くとも過去及び將來の事件の敘述と云つてゐること及び、詩人の靈感等と云つてゐること等より推して、吾々はプラトロンが詩成立の要素として、單に形式的な上記の如き四要素の外に想像のダイエーゲシスと云ふ要素を思ひ及んでゐたと考へられはしないか。

次に、詩の本質的要素として、他の藝術作品についても同様であるが、プラトロンは常に統一と云ふことを考へてゐた。「詩の全體性」と云ふ言葉は、それ自身では何を意味するのか判明しないが、次の如き言葉をとつて之を見れば、意味は確然として來る。「藝術家は總ての事物を秩序だて、其の一部をして他の部と調和、和合せし

め、遂に一の整然たる體系的統一體を建設するのである。⁽⁵⁵⁾斯くて、以上列記の外形的或は形式的四要素の外に内面的な二要素が來り加はることとなる譯である。

希臘に於ては、奇妙にも詩人と哲學者との論争は古くよりかなり後代迄續いてゐた様である。クセノファネースとヘーラクライトスの事に就ては已に述べた通りであるが、今吾々は之をアリストファネースに發見するのである。彼の「雲」に描き出されたるあの滑稽極りなきソークラテース、彼の「蛙」の千四百九十一行以下に呪はれたるソークラテースの事どもは世間周知の事であらう。プラトーンはそれに對して如何なる態度を持したであらうか。成程ポリテイアに於ては、彼は詩及び詩人の理想國入國に際しては條件付で之を許してゐる。之を或意味でのプラトーンの詩人に對する報復と見れば見られるのである。シユムポジオンに於けるアリストファネースの描寫も亦然りである。然し、此處で注意しなければならぬことは、哲學者としてプラトーンは藝術の世界を決して倫理乃至政治のそれに隸屬せしめてはゐないのである。又之をシユテリソンの如く

“Der springende Punkt seiner Kritik an der Poesie liegt zunächst nicht in seinen didak-

tischen und ethisierenden Neigungen, sondern in dem Nachweis seiner intellektuellen Ueberlegenheit über den Dichter.⁽⁸⁷⁾

と解すべきものでもない。共に盾の一面觀たるに過ぎない。私が先に述べた様に、プラトーンの哲學體系に於ける階級制度とは認識論的の意味に於てであつて、單なる倫理、政治、教育、及び科學の各偏頗主義ではなかつた、寧ろプラトーンに、ブルタークの彼の美しい言句詩の中に吾々は哲學以前の哲學を發見せねばならぬ。Σ, ἐν ποιήμασι περὶ λαοφίλων εὐμαρτέων を豫想して、そののではあるまいか。

- (80) G. Finster, Platon und die arist. Poetik S. 215.
- (81) Protagoras 326 A; Leges 810 C.
- (82) J. H. Butcher, Op. cit. p. 140.
- (83) Gorgias 502.
- (84) Respublica 392.
- (85) Ion 532.
- (86) Gorgias 504 A.
- (87) F. Stählin, Die Stellung der Poesie in der platonischen Philosophie, Nördlingen 1901, S. 4, 44, 60.
- (88) Plutarch, de Aud. Poet. ch. 1.

B 音樂について

英文學史上に於ても忘るべからざるプラトーンの名譯を遺したるジヨウエットは、音樂も詩と同じく現今に於けるよりも遙か廣汎なる領界を有してゐたことを指摘して曰く。“Music was opposed to gymnastic as mental to bodily training, and included equally reading and writing, mathematics, harmony, poetry, and music strictly speaking.”⁽⁸⁾と。ムージケーは斯様に種々のものを包攝してゐるのであるが、現代の所謂音樂については、プラトーンは之を三分野に分つてゐる。勿論、此の區分は形式上よりである。彼は云ふ。「一種は神への祈禱でヒュムノイと呼ばれ、第二は哀歌スレーノスであり、第三はバイオーネス、又は狂熱頌歌デイシユラムブロスである。」⁽⁹⁾と。斯くの如き分類より推せば、音樂は單に宗教的使命をのみ有し、それを全うすれば足りると云ふ様に考へられる。音樂と宗教とが其時代に於ては不離の關係を有つてゐたのは事實である。が、プラトーンは音樂の目指す所のものを單に上記の如きものに求めてはゐなかつた。然らば其當時の人口に膾炙せし如く、音樂の卓越せ

る點は心に快樂を與ふるからであらうか。プラトンは、音樂を斯く解することは許すべからざる冒瀆であると云つてゐる。實に音樂の目指す所は、美に對する愛求より外に出でないのである。

C 繪畫及彫刻

πρότερον θ' ἂν ἐν γυμνασίῳ προευνέμεν βέλους.....⁽⁹²⁾
 繪に描き出されたる如く物言はまほしき形なり

普通一般には、古代希臘に於て、繪畫と云ふものは、剛刻があれ程發達したにも拘らず、殆んど發達の跡を見せてゐないと思ひなしてゐる。併し、此のアイスキュロスの言葉の暗示する如く、可なりの程度迄繪畫も實は發達してゐた様である。であるからプラトーンも、繪畫の要素が光線と陰影であると云ふ様な近代的事が云へたのである。彼が繪畫⁽⁹³⁾も詩の如く「全體的藝術」である⁽⁹⁴⁾と云つてゐるのも、又それが模倣藝術であると云つてゐる意味も既に私は之を明かにし得たと信ずる⁽⁹⁵⁾。彫刻は繪畫と共に、詩が言語に關するものなるに對して、主として作爲に俟つ藝

術である、と云ふ一事を彫刻に關して云つて置く。⁽⁹⁰⁾

(89) B. Jowett, The dialogue of Plato, Vol. 5, N.Y. 1892 p. 474.

(90) 遺憾ながら此小論を草せし時の手落より今此の引照を知る由もない

(91) Leges 655 D; cf. Tim. 47 E; Leges 668 A, 700 E.

(92) Aeschylus, Agamemnon 253-254.

(93) Respublica 602 C.

(94) Ion 532 E.

(95) Cratylus 423 D; Leges 889 D.

(96) Ibid. 423.

。 偕て以上の如く、各個の藝術に就て私の誌す所は甚だ貧弱である。一面必要もないやうではあるが、今の場合己むを得ないのである。兎も角も私は以上の小論に於て、プラトーン的美學上の思索に何等新しい解釋を與へると云ふ様なことは企てず、單に世に行はれてゐる誤解の匡正と云ふ方面に強く意を注ひだつもりである。併し、此の諸問題の満足な解決は後日の研究に譲るとして、差當り私は次のダンテの名句を以て擱筆する。

Che credere e no, dicendo: "EII' è, non è."